

# 片岡(鵜鴉)家々譜に残された 藩祖高政の入部事情について

野々下 晃

(会員 佐伯市暁干)

平成八年十一月十二日市立図書館に於て、郷土出身の作家御手洗一而氏を迎え、市主催の歴史講演会が催された。この時の演題は「大友宗麟と毛利高政」であったと記憶しているが、会場は佐伯市南郡等近郷から集まった同好の人々で埋まった。

「毛利高政」と「大友宗麟」については、すでに氏が執筆刊行された長編の著書がある。その中の昭和五十九年二月発行「毛利高政戦雲編」には、特に「佐伯移封」という一項を設けて、高政が佐伯に入部した当時の情景が、次の様に詳叙されている。

「高政は入部に際して、前に大友幕下において佐伯の事情に詳しい関内と斉藤の両者に、佐伯入部の手順を探らせた。二人は元佐伯水軍を預かっていた米水津湾の竹の浦に住む御手洗玄蕃から、同じ水軍を預かっていた片岡

志摩守が、先導者として適任であることを聞き、そのことを高政に報告した。高政は片岡志摩守の先導で、慶長六年四月十五日佐伯入りをした。高政は城下町の古市に着いて嶺雲山潮谷寺を仮宿としたが、十年近く城主のいない佐伯の町は、予想以上に荒廃していた。高政は先導してくれた志摩守に礼をつくして残留をすすめたが、彼が高齢を理由に断り、子供の世代を付託して引き返した云々」と。

しかし、増村隆也氏著「佐伯郷土史」や、佐伯市史には高政「佐伯入部」の項目は設けているが、そこにはただ慶長六年四月十五日、諸家臣を引き連れて入国したとあるのみで、入部までの経緯については全く触れていないし、また毛利家の菩提寺は禅宗であるのに何故、浄土宗潮谷寺を仮宿所に選んだか等、種々矛盾した点が感じられた。

そこで平成八年五月頃と記憶しているが、著者御手洗氏に対して、それ等の記述がフィクションか、史実に基づくものであるかについて質問した。省みると作家である御手洗氏に対して、この様な所作は失礼であったにも拘らず、六月十八日次の様な趣旨の、懇篤な回答が届い

て恐縮した。

「質問の件何しろ二十年も前のことで、資料については時間をおくことにして、とり急ぎ当時の記憶を辿って記して見ると、佐伯には詳しいものは残っていないかった。しかし、丁度その時が佐伯市史編集の時期であったので、その編纂室で史資料を漁っているうちに、片岡氏の系図か覚書きの様なものが見つかって、その中に本文にある志摩守が高政を佐伯に案内し、梅牟礼城荒廢のため潮谷寺に止宿という、記事があったと記憶している。資料としては一級資料ではないが、片岡志摩守の案内に信憑性があったので、潮谷寺止宿を採用した。当時市史編纂委員の羽柴氏（故人）や佐脇氏（同）にこのことを話すと、竜護寺や洞明寺のような佐伯氏ゆかりの寺を避ければ、潮谷寺と善教寺ということになるが、志摩守の先導もはじめの史実であるから、そうかもしれないぬとのことであった。佐伯市史の社寺の項を参照して戴きたい。潮谷寺は宗麟時代の開基という一説が記されている。勿論確証はないが、古市村にこのような寺が存在していたということとを、佐伯や南郡の人々に知ってもらうためにも、敢えて本文に引用した次第である。今年には佐伯中学時代の同

窓会に出席のため、十一月月上旬に帰省の予定であるが、その節に会うことが出来ればと思っている。」と。

十一月十二日に開かれた歴史講演会は、この同窓会を機に催されたが、その席で氏から手渡されたのが、この片岡家の家譜であった。古文書の解読はむずかしいが、それが家譜で漢文体となると、初心者には歯が立たぬ。そこでこの道では権威であり、旧知の木許博氏に依頼した。添付資料（二）がそれである。

前にも述べた様に高政入部事情については、佐伯郷土史や佐伯市史では殆んど触れていない。しかし、御手洗氏によれば市史編纂当時関与された人々の中には、この片岡家々譜の存在を知っていた人がいたと推測されるが、それを本文に採用しなかったのは、それが個人の系図で、一級史料と認定されなかった故であろうか。またこの史料の中には、高政と当時の潮谷寺住職との間に、問答が交わされた状況が載っている。そのこと自体が寺の貴重な史料であるのみならず、それが二世深譽であったか、三世天譽であったかについても、解明の資料となるのではないか。御領分中寺社記には、「開山昌誉より深譽天譽三世迄、以上年号歴数知不申候」とある。

著述

鸚鵡志序

衛門尉娘某年四月念八日卒

統著

故命後改后岡

鸚鵡志序

初著清後賜一字

某年某月統若命為大夫食鸚鵡社天文十  
有七年戊申年二月十日唐從于宗鑄除義觀  
鎮上洛當是時三好與松永叛于足利將軍義  
輝公有和羽片岡山之役於是宗鑄為義輝公

大戰統若為人勇猛世多力勇並人夫故先鋒  
切繫于衷由是宗鑄大賞之有鸚鵡可改片  
岡之命後於宗鑄得相故直諫焉不用而解  
綬官去後無懷祿之意遂因故邑寓居于中津  
尚蓋有年焉當宗鑄男義統之世休豐臣公之  
台命國除大友家遂亡矣

慶長六年 丑年當藤系高政公新封于佐伯間

御手洗云著鸚鵡志序字能通於地理達於

軍旅巨之始見公于河從入巖雲山潮春幸

公問宗首拜曰淨土也公曰汝尊信之乎對

曰然公曰善世勿教改宗晉公略城地從晉

啓行於田中徘徊四望雙鶴在田山形如翔

鶴既得士兆晉經管基干斯城而定也時

志摩守獻梓鱒公曰有何故獻之耶對曰

是乃富國富家之名產也由是後世尚每

古北有可用於公朝之命也

公使人謂志摩曰吐晉辭以病不就不數年

而卒後其室獻密柑公當晉亡楚而又卒矣

母者清田鏗重娘慶長十有五年庚戌年七

月十八日卒行年八十有六  
瑞峯院殿前林次將兼左金吾休菴宗麟大  
居士九州二島並伊豫守領從四位下兼近  
衛權少將大友元衛門督源義鎮公天正  
十五年丁亥五月廿三日春秋五十八歲崩

存鶴鶴村中田

一休年長方室

大衛門  
二衛門を又た

資料(二)

書 下 し

某年某月統著命ぜられて大夫となり鶴鶴村を食む。天文有十七年戊申年三月、宗麟源義鎮の上洛に扈從す。是の時、當り三好、松永と足利將軍義輝公に叛き、和州片岡山の役有り。是に於て宗麟、義輝公の為に大いに戦い、統著人となり勇猛にして世々多力にして人を並ぶを兼ね。それ故に先鋒の功、衆に冠たり。是により、宗麟大いに之を償し、鶴鶴と有るは片岡に改むべきの命有り。後に宗麟の帰郷に於て故ありて直諫す。用いられずして官を解緩さる。去りて後懷禄の意無し。遂に故邑に因りて中津留に寓居す。蓋し有年(年有り)なり。宗麟の男義統

の世に當り豊臣公の台命に依り国除あり、大友家遂に亡ぶ。慶長六年辛丑年藤原高政公新たに佐伯に封ぜらるに當り、御手洗玄蕃、鶴鶴志摩守、能く地理に通じ、軍旅に達すると聞きて之を召す。始めて河に見ゆ。嶺雲山潮谷寺に入るに従う。公宗旨を問う。對えて曰く浄土なりと、公曰く、汝之を尊信するかと。對えて曰く、然りと。公曰く、善世を善くするに敢て宗を改むる勿れと。

公城地を略するにこれに従う。田中に啓行して徘徊し四望するに双鶴田に在り。形翔鶴の如し。既に吉兆を得たり。基を斯に經營して城市定まるなり。時に志摩守、絆鱒を献ず。公曰く、何の故ありて之を献ずるかと。對えて曰く、是れ乃ち富国富家の名産なりと。是より世々尚吉兆ある毎に公朝に用うべきの命あるなり。

公、人をして志摩に謂わしめて曰く、仕えよと。辞するに病を以てし就かず。数年ならずして卒す。後其の室蜜柑を公に献ずと書す。幾ばくもなくして又卒す。母は清田鑑重娘なり。慶長十有五年庚戌年七月十八日卒す。行年八十有六なり。 — 以下略 — 解説 木許 博